

書評 佐藤健二『ケータイ化する日本語』、大修館書店、2012年

西岡 武彦

出版後二年が経ち、時の経過に憾みなしとはしないが、その点はお許し願いたい。この時間の空白は筆者に次のような意味があったことをお断りしておきたい。この二年間でいわゆるグローバル化がますます進展してきている状況に鑑み、筆者はことばの分野だけでなく、人文科学、社会科学といった領域を超えて立ち現れてきている問題に対して、本質的な理解の必要性を痛感するに至った。本書に最初に出会った際、ことばの問題に対してのその面白い切り込み方に感銘を受けたが、未熟ながらこの二年間に筆者がさまざまな文献から学んできたことを振り返って、当時の印象とは違った角度から本書をきちんと位置づけしてみたいと思うに至ったのである。

本書は、そのタイトル「ケータイ化する日本語」という表現の軽さとは対照的に、その内容はタイトルからは想像もつかないほど重要な問題点を指摘している。日常化したケータイメールがわれわれに突きつける問題を鋭く抉り出し、現在の日本人が忘れかけている大切なことを思い起こさせてくれる優れた書である。

これからこの優れた書の論点を追いかけて、整理をし、最後に評者の意見を論じてみたい。佐藤氏の主題は、あまりにも身近なものになってしまった「『ケータイ』を取りあげ、『ことば』という道具の歴史と現在とを明らかにすることで、私たちの『感じること、話すこと、書くこと、伝えること、考えること』が直面している問題を考える」⁽¹⁾ということである。

まずはじめに、佐藤氏は、ことばという道具の歴史的考察にとりかかる。ここで、ことばの歴史にふれるためには、佐藤氏自身が本論を展開するきっかけともなった二つの大きな出会いに言及しないわけにはいかない。一つは、ルロワ・ゲーラン氏の『身ぶりと言葉』、もう一つは柳田国男氏である。この二つの出会いが佐藤氏の「言語論」を支えていると言ってよい。

ゲーラン『身ぶりと言葉』との出会い

ゲーラン氏は、これまでの頭脳中心主義を排し、身ぶり中心主義を唱えた人類学者である。われわれに刷り込まれた頭脳に重きをおく進化の見方では、今日われわれが享受していることばの多岐にわたる機能を説得的に説明することはできないという。佐藤氏がゲーラン氏から学んだ点は、「最初のもっとも重要な基準は直立位であった。二本足で身体の

直立を支え、立って歩く新しい身ぶりである。頭に居すわる『脳』ではなくて体を支える『足』こそが、人間への進化の最初のイグニッションキーだった⁽²⁾点である。

二足歩行により「手の解放」が見られ、それが「口の解放」につながる。そしてこの「口の解放」が言語によるコミュニケーション能力を格段に発達させたというのである。

動物の鳴き声のような単なる「声」の水準にとどまらず、「複雑な包含・差異の関係秩序をもち、明確で、安定的な記号性をそなえた『声』によって、人間は音でしかない現象に言語とってよい体系性を発達させた⁽³⁾」のである。

ことばは「手」、「皮膚」、「社会」、「空間」、「歴史」「神経系」である

このようにして発達の扉が開かれたことばを佐藤氏は巧みな比喩で表現する。佐藤氏の比喩は、本書を支えるキーワードとなっている。

ことばは「手」であり「皮膚」である。私たちがものを考えるとき、「『ことば』は抽象的なものをつかんで、組み立てたり、分解したりすることができる⁽⁴⁾」。こんなとき、たしかにことばは「手」である。感動したとき、その感動を直接受けとめる「皮膚」である。

ことばは「社会」である。個別の事物が他のものとの関係性のなかにおいて意味を持つのと同様に、道具としてのことばも、意味のネットワークのなかでその安定性を保つものなのである。声としてのことばは、人間が直立歩行をして生み出す「一種の楽曲」であり、「人間の身体の内なる振動」なのである。

ことばを発すると空気の共振が起こり、それが自分の耳と他者の耳に入る。こうして身体共鳴が起こり、意味が生成し、その意味が共有される。そして言語が共有され内面化される。ここにことばの社会性の原点があると佐藤氏は語る。

ことばは「空間」である。ことばは奥行を持った「空間」であればこそ、そこにずれが生じ、誤解が生じるのだとも言う。ことばの「空間」は言語によって異なるため、翻訳という作業は単なることばの置き換えではすまされない。

ことばは「歴史」である。ことばは、本来、発話した時点で時間性を内包している。「ことばは意味を保有する安定した記号の体系として、声の空間において現象し、参照できる経験として積み重なっていった⁽⁵⁾」がゆえに、意味においても奥行が増す。これを顕在化させたのが文字である。文字によってことばは記録され、また印刷革命によって複製力を拡大し、大きな社会性を実現した。

ことばは「神経系」である。これまでの比喩はすべて「神経系」ということばに収斂していく。

電話が生みだした変化

さて、このような比喻によってとらえられたことばは、ケータイによってどのような変容を被ることになったのだろうか。

ケータイがことばにもたらした変容を、佐藤氏は、ケータイ以前の電話の歴史をたどることによって解き明かす。そもそもわれわれの発する声は、空間において一定の距離感を示す存在である。声の大きさによって発話者との距離を測りながらコミュニケーションをとる。さらにこの空間は、われわれにとっては「主観的」なものとして捉えられている。われわれは聞こえてくる情報のすべてを意識するのではなく、選択的に、意味ある情報だけを受け取るのである。

このような空間に、電話は次の四つの変化をもたらしたと佐藤氏は指摘する。一つ目は空間感覚の変容、二つ目は第三者の役割りの縮小、三つ目は「外部」や「他者」と向かいあう、技能としての「ことば」の衰弱、敬語や丁寧語の衰弱、四つ目はメールの問題である。

「電話が生みだした『二次的な声』と『バーチャルな対面関係』は、われわれ人間のリアリティを支えている空間の枠組みを変化させ、ある意味で混乱させた」⁽⁶⁾ のであり、他者との距離の質にかかわる変容をももたらしたのである。「ケータイは、その変化を電話が置かれた家屋の内部から、社会空間へと拡張し、街頭へと浸潤させていった」⁽⁷⁾ のである。

ローカルな現実の空間における対話は、声の共有と視界の相互性において成り立つものであり、このローカルな現実の空間における声の共有は、他者の存在をも巻き込み、音声の共同体を成立させるものであった。ところが、バーチャルな電話空間は、話し手の声の交換によってのみ、二つのローカルな現実の空間をつないでいき、そこにおいては、傍らにいる他者が排除される。ここではすでにローカルな現実空間の中での分裂が生じている。佐藤氏が指摘する二つ目の変容、すなわち、第三者の役割りの縮小は必然化されていたのである。ケータイは、このような変化をさらに推し進めたのである。

電話空間は、他者を巻き込まない「親密性」と他者が関われない「内密性」とを内包している。しかしながら、電話が各家庭に広まる以前の呼び出し電話が一般的であった時代においては、話し手は、他人の家という現実のローカルな空間では、一定のモラルが必要とされた。電話を長引かせてはならないという配慮や、所有者へのお礼の挨拶という社会性が必要とされたのである。やがて呼び出し電話が消滅し、各家庭に電話が普及するとどうなるか。

各家庭に普及した当初は、外部との直接の接点をなす玄関に電話は据えられ、まさしく回線の音声によって客が迎え入れられたのだったが、次第にお茶の間へと移動する。お茶

の間にある電話は、個人への直接接続ではないという意味で呼び出し電話と似ていて、そこでの会話には、家族に対して一定の社会性が求められた。それは受け手が、傍らにいる家族の存在を気にするだけでなく、かける側からしても他者性は無視することができないものであった。「電話をかけるとき、直接の相手ではなく傍らに存在する他者が電話を取る可能性がある。その可能性は、『呼び出し電話』と同じように、社会性に対応しうる声の技法としてのことばを要求した」⁽⁸⁾のである。

固定電話はやがて各家庭の各部屋へと移動する。このことはコミュニケーションの本質である礼儀の技法を無用のものとすることを意味した。これは「声のふるまいが、身なり身ぶりとの整合性から離れていく」⁽⁹⁾ ことをも意味したのである。そしてケータイによる直接接続は、「外向きのことばの作法をはさみず、相手の登録と表示の機能を当然のものとして、つながりたい相手とだけ選択的につながる」⁽¹⁰⁾ 段階にまで到達したのである。

このような他者認識の衰弱はケータイメールにおいて瀕死の状態になる。ケータイメールの空間は、電話とは異なるけれども同様の親密さ、直接接続とは異なる間接性、声による共同性ではなく、絵文字も含めた文字による送り手の個性の絶妙なバランスによって維持されているがために若者たちに広く受け入れられるに至ったと佐藤氏は指摘する。

文字の文化は、視覚的存在物としての文字によって生みだされる思考と表現の構造化・体系化に対する分析力、さらには対象に対する批判力、説得力というすばらしいものを人類にもたらした。ワープロの場合は、この文字の本来の機能を存分に発揮することができ、書き手である自分は、書き手であると同時に編集者でもありえる。しかしながら、ケータイメールの狭すぎる画面がつけがけているのは、「密室化した仲間たちの個室のそれぞれの『線分』の連鎖であり」⁽¹¹⁾、この画面は、「そこにあらわれる他者は親密な共鳴をとときに示しながらも、必ずしも公共的で社会的な空間へと媒介する役割は果たしていない」⁽¹²⁾ のである。ケータイメールによるコミュニケーションは、伝達文章の短さゆえに、公共性を構築するには不十分であり、このことが他者認識の極端な衰弱をもたらすものに他ならない。

ケータイメールとことばを育てる空間

電話の普及からケータイの一般化に至るプロセスは、ことばの身体性が抑圧されてきたプロセスであると言い換えられる。これは礼儀作法のような他者への配慮を重んじる政治技術を育むことが抑圧されてきたプロセスだったのである。このような状態からことばを解放するためには、「他者ときちんと向かい合って、声によってことばを育てていく空間が必要であろうし、なによりも自らのことばの皮膚感覚を鋭敏にして、内なる『言い尽くせない』『書き切れない』ものと向かい合っていくことが大切」⁽¹³⁾ なのである。しかしな

がら、これを実現させるためには、ケータイの画面はあまりにも狭すぎるのである。

人と人との関係性においてことばをとらえる佐藤氏のことば論は、グーラン氏の身ぶり中心主義の考え方から大いに進化している。人と人のつながりである社会を立ち上げるうえで、ことばの持つ身体性、社会性が重要な役割を果たしている点を佐藤氏は繰り返し力説しているからである。

柳田国男の「ことば」論

佐藤氏のこれまでの論点の根底にあるのは、柳田国男氏から学んだ「ことば」論である。特に次の三点を佐藤氏は指摘する。第一は、ことばの機能をめぐってであり、ことばの機能を単に伝達力として見るだけでなく、思考を組み立てる力や感受性を構築する力ととらえる見方である。それは、ことばの身体性、社会性、政治性という視点からの見方である。

第二は、ことばの身体性、社会性、政治性という力の不足が、今の日本語のありかたのなかに、内在しているという問題点である。これは、佐藤氏がケータイメールにおいては実現不可能と指摘する、参照する力の衰弱につながる問題点である。人が書いた文章を参照し、それを引用するということは、書き手に対する敬意を伴うものであるが、この書く上での作法が衰弱し、剽窃が横行している。文字の文化の公共性を支えるこの重要な点が軽んじられているというのである。

第三は、ことばを創り出す力の衰弱という点である。テレビやインターネットの普及は、大量にことばを広げるといふ点ではそれなりの機能を果たすものの、これでは「『ことば』をかみ砕いて消化し、生活の場に定着させ、身につける力」は育たない。

以上の三点は、現在の日本語の身体性、社会性、政治性の欠如と端的に換言してもよいだろう。

佐藤氏は、とりわけ第三のことばを創り出す力の衰弱を問題視する。氏は、柳田氏の指摘する国語に内在している問題点、すなわち、国語が抱えている「言い尽くせない」、「書き切れない」不便さの問題を重視するのである。国家・行政のことばの生成に終始し、動きのない名詞を増加させ、いきいきとした動きや、モノのさまを伝える動詞、形容詞が減少しているという。たとえば、「○○化」という名詞の増加は、元の動詞や形容詞の意味を捉えきれない語の氾濫であり、このような問題点は、他との関係性のなかで安定性を維持することばのネットワーク性を揺るがしていくことになるのである。このような状況では、ことばを創り出す力の方も育たない。国家・行政のことばではなく、生活のためのことば、身体としてのことばの生成能力が育まれる環境が無くなってきている点を強調している。

本書で佐藤氏が取りあげている「ググる」ということばは、確かにグーグルで検索するときの身体の動きや感覚をそのまま写しこんでいる。想像力をかき立てることばの生成能力が衰弱しているという指摘は確かに共感できる点である。

「声の文化」と「文字の文化」のコラボはいかに

これまでの佐藤氏の論点を整理してみよう。電話がたどってきた歴史から析出された問題点、すなわち、「声の文化」の問題点は、次のとおりである。空間感覚に変容が見られ、第三者の役割りが縮小してきた。さらに、ことばは「政治性」を失い、他者と向かいあったとき相手を説き伏せたり、相手に敬意を払ったりする力が衰弱している。他者意識の希薄化の問題である。一方、「文字の文化」から析出された問題点は、ケータイという狭い画面では、これまで蓄積されてきたことばを、もはや礼儀をつくして参照し、自分の文章に取り込むことが出来なくなってきたという点である。すなわち、書く上での作法の衰弱である。

この二つの文化からの問題点はどのように交錯するのだろうか。佐藤氏によると、ことばの力の衰弱である。他者意識の希薄化とは、ことばの政治性の喪失であり、書く作法の衰弱とは、これもまた、きちんとことばに向かい合って、参照しながら書くということばの力の衰弱なのである。

佐藤氏はこの原因を、ことばの生成能力を身につける場が減少している点に見出す。ケータイはこの場の減少を加速化させているのである。

佐藤氏の主張は、この能力の復権である。それでは氏のこの二つの文化からの問題点のコラボははたして成功しているといえるのだろうか。

評者には、歴史社会学の手法を駆使し、今日の問題をただ今日的な問題として、その解決策を模索するのではなく、歴史性を持つ社会の問題として大きな視点から論じる佐藤氏の論は、ことばの問題を氏の専門領域である社会学の問題に帰着させる点で見事に成功していると思われる。ことばという文化は「歴史」の比喩で的確にとらえられていたように、変化を受容するものである。佐藤氏はこのことばの柔軟性に大いに期待している。

ここまでくると佐藤氏が「ケータイ化した日本語」というタイトルに込めた意味合いが浮かび上がってくる。日本語自身が置かれている状況に対する警鐘である。今の日本語は、文字の向こう側にいる人の気持ちを理解し、共感しようとする力も、また他者の痛みや苦しみや喜びを、自分の経験に関連づけて想像する力も失ってしまっている。この認識は、電話の無かった時代から、今までの歴史を振り返ることによってはじめて得られるものである。佐藤氏は、日本語の現在を位置づけ直すために、歴史に眼を向けることの重要性をこの本で訴えかけられたと言えるだろう。

現在を見据える眼

忙しなく毎日を過ごしている筆者にとって、日本の現在をきちんと考えようと意識することは少ないが、近年の言論界は、グローバル化ということばに躍らされることなく、問題の核心をきちんと見据える必要性を訴えかけている。今という時代を見据えると、日本は殺伐とした時代だと言われている。佐伯啓思氏によれば、「これまでのルールや慣習や道徳を守って折り目正しく生きていくことはできない」⁽¹⁴⁾ 時代である。「誰もが頼りにできる共通の価値観や道徳規範が失われた時代」なのである。社会という公共性を創り出す力が衰弱している時代なのである。これはまた、ケータイが創り出す空間に象徴化されるように、公共性に代わって「個」の価値観が重視される時代であるとも言える。このような時代であるがゆえに、今の日本に失われている価値観、道徳規範をきちんと見据え直すためには過去に眼を向け、われわれがこれまで歴史にどのように織りこまれてきたのかを考えなければならないのである。

本書は、ことばを素材として、われわれの大切なものが失われている点を照らし出している。これは今日の日本の置かれている状況と見事に符合する。

本書は、われわれ日本人が失いつつある大切なもの、公共性を立ち上げることばの力の復権を提言するものである。人と人との関係を紡ぐことばの危機に今一度目を向け、それに立ち向かうことは、これからの生を悲観的ではなく、肯定的に生きる原動力となるのではないだろうか。佐藤氏の著書は、今の日本を考える格好の一冊であると位置づけたい。現代日本の現状を知るためにも広く読まれることを期待する書である。

注

- (1) 佐藤健二『ケータイ化する日本語』、大修館、2012年、p6
- (2) 前掲書、p12
- (3) 前掲書、p16
- (4) 前掲書、p22
- (5) 前掲書、p53
- (6) 前掲書、p81
- (7) 前掲書、p82
- (8) 前掲書、p162
- (9) 前掲書、p179
- (10) 前掲書、p168

- (11)前掲書、p245
- (12)前掲書、p245
- (13)前掲書、p274
- (14)佐伯啓思『日本の宿命』、新潮社、2013年、p23

参考文献

佐伯啓思『日本の宿命』、新潮社、2013年